本稿は、前 7 世紀にアッティカ地方で隆盛したプロト・アッティカ式陶器を対象に、これらの陶器において神話表現が隆盛した背景に光を当てることを目的とした。神話表現が、その生成期に、どのような状況のもとで造形化されたのかという問題は、これまで、美術史学、考古学、そして歴史学という隣接しあった学問領域の狭間に置き忘れられていた。以下では、まず本稿の学術的背景を確認する。

ギリシア美術において、神話表現は欠くことのできない要素の一つであり、作例の収集はもちろん、政治史的、社会史的観点からの膨大な研究史を擁する。主に研究対象となってきたのは、作例が多く、文献史料が存在するアルカイック期以降の時代であった。その前段にあたる前 7 世紀の神話表現は、古代ギリシア美術史の序章的扱いをうけるに留まってきた。1960 年以降、K. Fittschen や K. Schefold らによって、前 8 世紀末から前 7 世紀の神話図像の網羅的な収集が開始された。この作業は、G. Ahlberg-Cornell による各図像と、その主題解釈に関する先行研究をまとめたカタログによって 1992 年に完成を見た。これらの先行研究により、前 8 世紀後半から前 7 世紀、すなわち古代ギリシア美術の黎明期における神話表現に光が当たり、その全体像を把握できるようになっていった。

しかしながら、こうした先行研究は、神話表現の成立を所与の現象として捉えるところから出発している。神話表現が盛んに造形化されるに至った要因は、叙事詩の成立という全ギリシア的動向によって説明されるに留まっている。前 7 世紀は、ホメロス叙事詩が普及した時代であり、当然ながらそれに呼応して神話の造形化が促されたと考えられる。

前 7 世紀のアテナイを中心としたアッティカ地方で隆盛した一群のプロト・アッティカ式陶器は、先駆的な神話表現を有する大規模作例を擁する。アッティカ美術の、アルカイック期以降の繁栄はよく知られている通りであり、前 7 世紀のプロト・アッティカ式陶器の隆盛は、様式史的に見れば、何ら不思議な点はない。しかしながら、考古学調査によれば、前 7 世紀のアッティカ社会は陶器輸出が停滞し、デルフォイやオリンピアといった全ギリシア的聖域への奉納物が、他の有力地方に比べて極端に少ないことが判明している。他方、そうした物質資料の少なさに反比例するように、この時期の神話表現を有する最も重要な大規模作例の多くはプロト・アッティカ式陶器に見られる。神話・叙事詩表現の隆盛は、叙事詩の普及という根本的な条件を抜きに考察できないことは確かだが、他方、神話の造形化が、社会の停滞が想定されているアッティカで促された背景についてもさらなる検討が必要とされていたのである。

前 7 世紀の神話表現研究が、もっぱら作品収集に集中し、その背景に関する考察を欠いてきたのは、同時代の文献史料が残っていないことが要因であると考えられる。文字史料を欠くがゆえに、神話表現の成立を促した社会像の想定が困難だったのである。このような状況は、近年の考古学分野における研究の進展と、考古学データを用いた歴史学からのアプローチにより、明瞭に変わりつつある。I. Morris による、葬制に基づいた社会像の復元は、この研究領域の端緒を開いた。以来、考古学的に把握される葬制の変化に基づき、アルカイック期以前、すなわちソロン以前の社会像について、様々なモデルが提案されてきた。最も有力なのは、現在ポリス生成期ともいわれるこの時代を、前 9 世紀ごろから存在した貴族層と、新興勢力の平等主義的な勢力との激しい対立の時期と解する I. Morris の説である。これには反対意見も提唱されているものの、葬制から社会像を構築するという方法論については概ね賛同を受けていると言ってよい。

それ以降、プロト・アッティカ式陶器は、この文字無き時代の社会を反映する有力な歴史資料と見なされ、主にこれらの陶器と葬礼の関係に注目が集まった。J. Whitley は、従来の美術史研究では問われることのなかった、プロト・アッティカ式陶器と社会の関係に光を当てた。S. Houby-Nielsen は奉納溝を中心とした儀礼においてプロト・アッティカ式陶器がどのように用いられたかを検討した。また近年では Alexandridou が、奉納溝の儀礼を、上記のようなポリス生成期の社会変動の中で、上層階級、すなわち貴族層によって行われたポリス型社会への抵抗のしるしであったと解した。

しかしながら、このような考古学に基づく歴史学的な立場からの考察では、神話表現の誕生は副次的な問題にとどまり、等閑に付されてきたと言わざるをえない。その一因は、出土状況が明らかな遺物のみによって社会像を想定する、考古学の学問的性質にあるのではないだろうか。神話表現を有する「美術作品」は、出土状況が不明瞭なものが多い。プロト・アッティカ式陶器も、ケラメイコス出土の陶器を除けば、その大半が古代のうちに再利用を被ったか、あるいは本来の出土状況が不明瞭になっている。美術史の分野においては、考古学的証拠が必ずしも存在しなくとも、様式史的観点に基づいて作例ごとに元来の用途の推定がなされてきた。しかし、考古学資料に基づいて社会像を想定する研究においては、こうした出土状況不明の作例は研究対象から除外されてきたのである。

本稿は、以上のような学問領域間の方法論の相違を乗り越え、各領域の成果の間にみられる間隙に架橋することを目標とした。以下では具体的に、本稿の内容を振り返っていき

たい。

第 1 章では、前 8 世紀半ばから前 7 世紀、すなわち後期幾何学様式 I 期からプロト・アッティカ式期までの墓標陶器、もしくはその可能性の高い作例を対象とした。墓標陶器を対象としたのは、前 8 世紀から前 7 世紀にかけて継続が確認できる唯一の葬礼の記念物だからである。S. Houby-Nielsen の挙げた 29 点の陶器に、3 点を筆者の調査によって付け加え、計 32 点を別表にまとめた。そして、その図像の特徴や変遷を浮かび上がらせることを目指した。この章では、上記のような考古学的アプローチと美術史的アプローチの統合を試み、出土状況が不明なものも、装飾の正面性と器形的特徴を根拠に検討対象として加えている。その結果、前 8 世紀中ごろ、すなわち後期幾何学様式 I 期には墓標の主題として葬礼図が見られるものの、II 期にはそれがあまり見られなくなり、プロト・アッティカ式期には完全に消滅することが明らかとなった。また、前 8 世紀末、後期幾何学様式 II 期には、墓標自体もほとんど存在しなくなるが、前 7 世紀には復活する。さらに、前 7 世紀にはいると、墓標装飾の主題は東方的な混成生物であるスフィンクスや動物、そして神話表現が見られるようになる。先行研究で指摘されている通り、この時期の葬礼が上層階級の男性のみに独占された状態にあったとすれば、神話表現は男性の葬礼と結び付いて表現されるようになったということが可能だろう。

第 1 章での検討は、出土状況が不明瞭なものを含めた仮説に基づくものである。そのため、第 2 章、第 3 章では、第 1 章の考察を補強するため、出土状況が多少なりとも判明している個別の作例を取り上げ、神話表現の成立をより具体的な側面から探ることを目的とした。第 2 章で取り上げた《エレウシスのアンフォラ》は、アッティカの地方都市であったエレウシスから、土葬の少年の陶棺として発見された。従来は、この出土状況が重視され、本作に描かれていた「オデュッセウスのポリュフェモス退治」と「ペルセウスによるゴルゴン退治」の二つの神話表現は、少年の死後の安寧を守護する図像であると解されてきた。しかしながら、アテナイでもエレウシスでも、当時このような豪華な装飾陶器が子供の甕棺に用いられることは極めて例外的であった。この時期、アッティカでは上層階級に属する成人の男性に、目に見える（visible）墓を営む権限が占有されていたと考えられる。彼らは火葬され、墳丘を築き墓標を立てるなど、墓の外観を壮麗に整えた。それに対して、子供は粗雑な陶器を用いて土葬され、地上に記念物が置かれることはなかった。こうした当時の葬制上の成人と子供の区別を鑑みるに、《エレウシスのアンフォラ》は、元来

は子供のための甕棺ではなく、成人男性のための墓標であったと想定される。その上で、このアンフォラに描かれた 2 人の英雄が活躍する神話場面がどのような意味を有しているのかを考察した。その考察の過程で着目したのが、当時ギリシア全域に見られた墓崇拝である。前 7 世紀には、主にミュケナイ墓、すなわち同時代よりも古い墓や遺構へ供物を捧げる崇拝行為がなされていた。こうした奉納行為は、C. Antonaccio によれば祖先崇拝に根差した行為であり、古代ギリシア人は自らの近親者であった死者と、遠い神話上の父祖である死者の双方を崇拝していた。そして前 7 世紀アッティカの葬礼は、前者を後者に近づけようとする意図が看取されるものであったとされる。こうした背景を考慮すれば、《エレウシスのアンフォラ》に表された英雄たちは、上層階級が自らと英雄的な祖先とを結びつけることを欲した結果、表されたものであったと考えられよう。

続く第 3 章では、第 1 章、第 2 章で得られた結論を補強するために、アテナイの市壁に近接していたキュノサルゲスのギュムナシオンから出土した《キュノサルゲスのアンフォラ》を取り上げた。本作は、《エレウシスのアンフォラ》と同様、明瞭な装飾の正面性が看取され、公表者によってギュムナシオンが墓域であった時代に、恐らくは墓標のような墓の記念物であったと推測された。先行研究では主に、断片的に残った頸部と胴部に描かれた人物を伴うパネル 2 点の主題解釈がなされてきた。G. Ahlberg-Cornell は、胴部の天馬の引く戦車に乗った 2 人の人物と、それを見送る人物について、オイノマオスとミュルティロス、そして見送るヒッポダメイアであると解した。しかしながら、《エレウシスのアンフォラ》や本作を含めた大型の頸部アンフォラを比較すると、類例のほとんどが、主題は異なるものの、英雄がその敵を倒すという内容を示していることが判明した。G. Markoe は、こうした表現を、魔除けなどの呪術的図像ではなく、英雄の勝利を示す図像であると解している。東方ではライオンが草食動物を倒す獣闘文は、王家の勝利を示す図像である。そしてホメロス叙事詩の中では、英雄とその敵を描写する際に、ライオンと草食動物の比喩が用いられている。本作を含めた 1m を超える大型の頸部アンフォラは、装飾の正面性から判断するに、いずれも墓標であったと考えられる。この推定に立てば、本作の図像も、英雄の勝利に関わりのあるものと思われる。本作に描かれた主題に関して言えば、オイノマオスとミュルティロスよりも、むしろ戦車に乗るペロプスとヒッポダメイアが表されている可能性が指摘される。

第 3 章までは、主に墓標陶器であった可能性の高い作例について考察した。しかしなが

ら、プロト・アッティカ式陶器の全てが墓標陶器であったとは考えられない。そこで第 4 章では、プロト・アッティカ式陶器の一大出土地であったアイギナ（エギナ）で発見された《メネラオスの台座》に着目した。台座の主画面には、5 人の戦士が行進する様子が表され、1 人の人物の近くに「メネラス」の記銘が付されている。先行研究では、この記銘が叙事詩に登場するスパルタ王のメネラオスかどうか、あるいはこの表現が特定の神話場面を表現することを意図しているのか否かなどについて議論が行われてきた。しかし本稿では、現状では解決のできない主題に関する問題には立ち入らず、むしろその器形に着目した。高い円錐形の台座にディノスを乗せるこの器形は、北シリアのウラルトゥ王国の青銅製鼎を模していると考えられる。ギリシアでは、陶器による代用品が盛んに制作され、アッティカでは、アテナイのケラメイコスから出土した前 7 世紀の儀礼陶器にこの形のものが多い。出土状況の詳細が不明な以上、仮説の域を出ないが、本作はアテナイ、もしくはアイギナの上層階級の葬礼のために作成された陶器であり、その極めて東方的な外観は、彼らの自己顕示の意欲を反映したものであったと考えられる。それと同時に、本作は、神話上の父祖との繋がりを示そうとするものでもあっただろう。

最終章である第 5 章では、第 1 章の別表で示したように、前 8 世紀、すなわち後期幾何学様式 I 期以降に墓標装飾から消滅した、プロテシスやエクフォラ図が前 7 世紀にどのように変容していったのかを考察した。その結果、これらの葬礼図は墓標からは消え去るものの、ケラメイコスの奉納溝陶器に見られるようになることを指摘した。ケラメイコス美術館所蔵のオイノコエ inv. 149 は、奉納溝の儀礼で燃やされた結果、陶画の表面が摩耗しているが、12 人の女性が棺台に寝かされた死者の男性を悼む場面が確認される。葬制上の変化として、前 7 世紀には、前 9 世紀から見られた裕福な女性墓が消え、墓は少数の、上層階級に属する男性のものに限定されていったとされている。さらに、この変化と同時に副葬品が減り、墓の外側に設置する墓標や塚などの記念物が増加していった。本作に加えて、現存する 2 点のプロト・アッティカ式のプロテシス図においても、死者は男性、哀哭者は女性であることが確認される。当該の、ケラメイコス出土の葬礼図は、 inv.149 のオイノコエを含めて 3 点と少なく、これらの作例の特徴を一般化することは困難である。しかし、少なくとも作例全てにおいて死者は男性、哀哭者は女性、という特徴を示していることが指摘できる。またこうした現象に並行して、本稿が考察してきた、葬礼における神話表現の成立という側面を考慮する必要がある。すなわち、前 7 世紀のアッティカにお

いては、神話表現は墓の外に置く記念物に表され、他方旧来の葬礼図は、死者と密着した奉納溝の儀礼において示されるようになったのである。

本稿の目的は、プロト・アッティカ式陶器における神話表現の隆盛の背景を探ることであった。《エレウシスのアンフォラ》を始めとする、神話表現を有するプロト・アッティカ式陶器の存在はよく知られている。しかしながら、これらの生き生きとした、試行錯誤段階の神話表現は、誰のために、どのような目的のもとで制作されたのだろうか。この疑問が本稿の出発点である。本稿の考察を通して明らかとなったのは、プロト・アッティカ式陶器において神話が盛んに造形化された背景には、前 7 世紀アッティカの社会変化が存在したという点である。ポリス社会へと向かう変動期において、アッティカでは葬礼を営む権利が上層階級に属する男性に独占されるようになった。同時に、墓は副葬品よりも記念物を重視するようになり、上層階級の男性のための権威を示す場になっていったと考えられる。こうした変化と並行して、墓の重要な記念物である墓標陶器には、神話表現、とりわけ英雄の活躍場面が表されるようになった。上層階級に属する人々にとって、神話上の英雄と自己の繋がりを示す必要が生じ、神話・叙事詩主題、とりわけ敵と戦う英雄が葬礼において造形化されたのではないだろうか。